
リップ

佐々木保典

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リップ

【Nコード】
N2270K

【作者名】
佐々木保典

【あらすじ】
生きるかたちを探している。
そう告げた同僚が宇宙空間に身を投げ出してから半年以上経った。
「私」は、そのことばの意味を探して同僚の故郷を訪れるが……。

第1話（前書き）

かたちのないはなも書き上がってないのに・・・。

と、とりあえず。

この小説は2話で終了します。

ご安心を（？）。

第1話

黄は地の色であり、衰えの象徴であるところかで聞いたことがあるが、私の知る限りの記憶の中で、『黄昏』ということばの響きに衰老を感じたことなど一度もなかった。かつて何度も見た、宵闇を待つ海の色だったし、故郷の湖に沈む夕日の色だった。黄昏に誘われて現れる夜が、次の日に明けないこともなかった。

しかし、明けない夜が確実にこの世に存在していることを、夕日に鈍色に光をぬめらせるこの墓石が証明している。

生きるかたちを探している。

友人がそう呟いた日も夕焼けが映える日で、私は黄昏を愛でながら逆光の中に立ちつくす彼を見た。彼の言葉が私の脳裏に輝かしく焼き付いたのは、きっと陽光のせいに間違いない、そうでなければ私も彼の呟きのどこかに感慨を抱いたのだろう。不思議な話ではある。どうして生きるかたち、などという曖昧で極めて不明瞭な言葉の印象に、心を囚われたのだろう。自問して、どうにかなる類のものではない。彼の墓石をすがるように見つめる私がその証拠だ。

何をおもいながら彼が生きるかたちなどと呟いたかは、いまとなつてはわからない。彼は地球を飛び出して、宇宙を自由に航海できる資格をもつ数少ない人間の一人だった。仕事に卒が無く、細やかな配慮が出来る男で、失敗したからといって簡単には修復できない宇宙空間での業務をなんなくこなした。だから誰もが、彼が船殻さえも捨てて生身の遊泳を行ったなどは、最初信じなかった。

私は、地球上の人間が宇宙空間で行うビジネス、多くは軍事的なものだが、それを仲介し、宇宙士と呼ばれる職業宇宙飛行士に仕事を斡旋する商売をしていたので、彼が無言のままコンソールにハッチ開放の指示を出して、大気などというのどかな響きとはまったく無縁の世界へと飛び出していく様を、取引先の人間と一緒に全て見ていた。彼はよく種々の改良点に気づく有能な宇宙士で、地球外作

業シャトルを扱う大手メーカーのアドバイザーでもあったから、彼の乗る船には金がかけられてあり、ハッチが開いたからといって、すぐさまにすべてが真空に晒されるような柔な構造にはなっていないはずだった。彼は自動起動をいったん全て落としてから、ゆっくりと何かを確かめるようにハッチを開き、緊急用の防護扉ロックも手動で解除した。外気圧と居住空間の圧力の差が、限りなく0に近いときにだけハッチが開放されるように組まれたシーケンス命令も、彼は易々と書き換え、何事もなかったように、真空に吸い出されていた。

彼の表情が、最後に船殻カメラにアップになり、確かに彼は何かを呟いたように見えた。マイクが彼の声を拾うにはすでにまわりはあまりに閑散としており、空気さえもどこかへと消えていった後だった。

彼はどこへ行っただろう。

どんな姿になっているのだろう。

周囲は狂人の行動だと噂したが、正気の沙汰の範囲に、彼の求める生きるかたちがなかったのだとすれば、私だけは首を傾げずにいられるように思った。彼は間違いなく、最後に私に向かって何事かを呟いたのだ。特に親しい間柄でもなかったが、この一件の後、彼は私を親友と感じてくれていたのだ、と思うようになった。皮肉なことに、彼はすでにこの世の人ではなかったのだ、私は親友を作り出したと同時に、刹那の間もおかず失ったのだ。おそらく、これからさき、思い出す彼は常に親友の様相であるが、現実には存在せず、彼の生と死は重なり合ったまま、私の内側に息づき続けるのだろう。その出来事は去年の末も末のことである。

彼の墓に流れる夕暮れの静かな響きが、私の心にさざ波を立てた。大事なビジネスのパートナーを、それもとびきり優秀な宇宙士を亡くしたのだから、私の商売には翳りが差していた。良い機会だと思っただけの故郷を訪ねて、墓参しようとしたところまで来てみたところ、彼が死したであろう日から数ヶ月が経っていたにも関わらず、彼の最

後の表情と言葉が私の脳裏にどうしてもこびりついて離れないでいる事に気付いた。わずらわしい、得る物の何もない煩雑な書類仕事を放棄する口実が欲しかった。しかし、それにも増して私は答えを探している。彼が言った、生きるかたちという言葉に対する答えを。濃密に、限りなく原色に近い黄の色が空に波及していく様をひとしきり見つめた後、私は彼の墓石の前から立ち上がった。ここに来れば何かがわかるかもしれない。幻想に過ぎないことだった。墓石に彼の魂が宿っているなどということはけしてないわけで、私はただ静かに思考が出来る場所を探していただけなのかもしれず、結論から言えばそれすらも、裏切られたのだった。

墓地には他にもいくつか人影があった。

枯れすすきが風に鳴る中に、黒髪の女性が立ちすくみ、私を見ていた。私は彼女に見覚えがあり、おそらく彼女もそうで、髪をかき上げて私に会釈する。友人の妹だった。彼は異腹の妹がいると言つて写真を見せてくれたが、なるほど、無骨だった彼とは男と女という性別を抜きにして纏う空気が違った。友人が梅の木のような節くれだった雰囲気だとすれば、妹はまるで木蓮の花のようにうぶ毛に包まれた優しさを持っていた。彼女とは、彼の葬儀の時に一度顔を合わせた。

「兄の」

私が会釈を返すと、彼女は私の顔を確かめるように一歩足を出した。ストッキングをはいた白い脚を、黒いパンプスが彩る。カーデイガンは濃紺で黒に近いとなれば、今まさに葬儀を抜け出てきた未亡人のようで、私の胸が苦しくしまった。

「わざわざありがとうございます」

いえ、と私は短く言葉をかけ、近づいてくる彼女を見つめた。すすきがざわりと呻いた。風がのそりと起きあがったようだった。心情と景観が不思議と一致する瞬間を実感して、私の表層にさっと冷たい何かが走った。

「はやいものね。もう半年経ちました」

「そんなになりましたか」

濃紺の夜の訪れを私は感じ始めていた。

あかね色がさり行く。

彼女が手向けた白い花の一輪が、風に遊ばれて墓石から転げ落ちた。彼女はその様を見つめて、あら、という表情をこぼし、しかし微笑みながら、雑草のクッションのうえでさわさわと揺れる花を助け起こそうとは思わなかったようだった。私は几帳面な性格であるので、仲間を追い出されたような白い花が気にかかり、彼女にひるわないのですか、と尋ねた。

「いいんです。ひとところに固まる生き方が必ずしもよいとはいえないと、教えてくれていたのかもしれない」

私が思っているほど、彼女は心を痛めているわけではないのではないのかもしれない。彼女の振る舞いはそう感じさせる。

「ひとところ、ですか」

「ええ。あなたもそういう方だと伺いました」

「お兄さんに？」

ことりと彼女の首が音をたてて頷く。機械仕掛けの人形のように。

「私はどちらかという仲間はずれを嫌う方です」

彼女はきょとんと瞳を澄ませて、何も答えなかった。何も答えられないのかもしれない。我ながらまずいことを言ったものだと思う。初対面の人間に吐く言葉ではなかったか。彼女は何もなかったように言葉を続けた。

「兄からなにか聞いていませんか」

「どういう理由で、ということであるならお答えできることは何もありません。ただ、手紙をいただきました」

友人から数日前に小包が届いた。白い便箋にびっしりときめ細かく端正な字体で、友人の言葉が書き連ねてあった。なぜ今になって届いたのかわからないが、彼は自分の死を計画的に進めていたと考えるのが自然だろう。内包物はもう一つあって、便箋と同じ白色の

ストレージだった。便箋にはそのことも書かれていて、彼の故郷にある端末にストレージを接続することで、内容を把握出来るようになった。私は、どこかに彼がとった行動の理由が書かれてあるのではと、便箋を何度も読み返してみたが、私の想念にかかるような文章はどこにもなく、ストレージにこそなんらかの手がかりがあると信じることにした。

手紙は、実家には件の妹がいる、妹は必ず毎日のように墓参するだろうから、機会があれば会って話でもしてみてもらえないか、とも綴られていて、私は君と私の妹が出会うことで、この世界がどのように変容するか、みてみたいものだとは締められてあった。

大それたことを惜しげもなく吐く男だと、私は半ば呆れながら手紙を読み返した日のことを思い出して、彼女にはにかなだ顔を向けた。太陽の残り香が、風をわって吹いてきた風にさらわれたようだった。にわかには周囲がぐらくなつて、辺りはしんと静まりかえり、気づけば私達以外に誰もいなかった。

「あなたに会えと」

私はようやく苦笑を抑えることができた。虫たちの声が聞こえ始めていた。そういえば今年は酷暑が続く、ようやく落ち着ける気候になってきた。私は秋風に誘われてここにいるのかもしれない。

「そうですね」

微笑みの絶えない表情がなんとも愛らしい。

「この」と、いつて私は懐を探る。白いストレージは淡い燐光をともして、宵闇に浮かび上がった。

「ストレージを預かりました。何か答えを探るなら、まずここからのような気がします」 彼女は頷いたようだった。

不思議に思う。私と彼女は先程から、本当に近くで会話をしているはずなのに、どこか遠く離れているように感じる。初対面の緊張や、仕事柄相手を探ろうとする慎重な私の性格が災いしたとするのが都合が良いように考えるのだが、それ以外に私と彼女を遮る何かがあるように思われて仕方がない。ストレージ表面の螢のような光

がよりいつそう、その思いに拍車をかけた。

彼女は無言で手を伸ばす。私は驚いて無条件に手を引つ込めようとしたが、かえって手を突き出すかたちになり、彼女の右手とぶつかった。がちゃんと、重たい金属にあたったような気がして、私は顔をしかめた。彼女は平然とした顔つきだったので、どうやら、彼女のプレスレットが何かに自分の手を打ちすえたらしい。

彼女は特に謝罪をすることもなく、ストレージを手を取った。

「なつかしい」

「大事にお使いのようだ」

私は痛みをこらえて呟いた。ずいぶんと年月の経った代物だとわかる。表面の塗装はもしかしたら最近行われたものかもしれないが、ストレージ、おそらく磁気メディアの一種だと思われるが、私は同型の機種が市販されているのを目撃したことがない。

「兄です」

「え？」

「兄の物です」

彼女が微笑む。

「ああ、やはりそうですか。そのメディアを再生する手段が、彼の、ご実家にあると伺ったのです」

「ええ。確かに。今夜はどこかにご宿泊の予定がありますか？」

「いえ。あてどもなく、ここに来たという感じです」

「あら。ならどうぞ、ご遠慮なくうちいらっしやって下さい」

「そういつてもらえると助かります」

ストレージの内容を早く知りたいと思う以外に、私には、彼について聞きたいことがいくつもあった。何しろ私は親友のことをほとんど知らない。もっとも、親友だと認識していた自分も知らないが、それはさておき、彼女の提案はまさに渡りに船という奴だ、と古いことわざを懐い出しながら、考えた。

友人の妹はいち早く歩きはじめていた。彼女は彼の墓に頭は下げなかった。いつもここに来ているのなら、案外死者に対して身近

なものを感じているのかもしれない。

彼女は両腕で大事そうにストレージを抱えていた。そのストレージさえあれば、まるで何もいらなくてもいうようだった。私は暮れなずむ中に分け入ってしまいそうな彼女の背を慌てて追ったが、彼女はついに自宅に帰り着くまで一言もしゃべらず、後ろを振り返りすらしなかった。

第2話

案内されたのは古い家だった。もう家の大半は、緑の蔓性植物に覆い被されそうで、野趣といえは聞こえはよいが、とにかく、古いというしかない。いつの時代に建てられたのか見当もつかない石と木の複合建築だった。私は、今すぐにも倒壊するのではないかと不安になり、それでも知的好奇心を満足させないわけにはいかず、おろおろとしながら彼女にいぶかしげな視線を送り、入り口に立ちすくんだ。

彼女が玄関に近づくと、淡い黄色の灯りが点いた。彼女はようやく振り返って、

「どうぞ」

と、いった。私の足枷をほどくような、甘い声だった。

虫声は屋敷の中でもよく聞こえた。廊下には年代物の絵画がいくつか連ねてあり、私は美術には疎いので誰が書いたか、どこの国の匂いがするかなど、一切わからなかったが、全て婦人がテラスでくつろいでいる構図だった。テラスといえば、彼女の家にも露台があり、露台のある中庭からは星も見えた。私は、循環式のポンプで作られた人工の池を中心に据えたテラスを左側にみて廊下を進み、エントランスからは最も遠い部屋に通された。友人の部屋だった。引き戸を開けると、ふっと風が這い出てきた。友人が昔よくつけていたコロンの匂いだった。

「お茶を持ってきますわ」

「おかまいなく」

出てゆく妹に声をかけて、ぐるりと室内を見渡す。一面に敷かれた赤い絨毯の上に散乱した小さな荷物があり、洋の東西を問わず花瓶や器が収納棚のあちこちに置いてあった。よくみると機械部品も多かった。部品の一つを手にとってみようと思ひしやがみ込む。体を支えるために伸ばした左手の中に、円筒形の感触が浮かんできた。

「口紅か」

おそらく彼女のものだろう。何かの弾みに落としたものに違いはない。私は特に何も考えず、しかし口紅は自分のポケットにおさめた。友人はここで何をしていたのだろう。部品を集めればちよつとした機械が作れるようで、同じような部品も整理されてプラスチックのボックスに綺麗に整頓されている。交換用だとすると、何かをすでに組み上げた後なのか。

「汚いところでしょう」

振り向くと彼女が立っていた。透き通るような左手に、紅茶をのせた盆がのつている。左手をよく見てもプレスレットなどをしていない気がない。私は何に手をぶつけたのか、少しの間考えたが、太陽の光が翳っていた後だったので、形状などに憶えはなく、彼女も外してきたのだろう。

「ずいぶんとまあ、何かに打ち込んでいる姿が残っていますね」

「兄は手先が器用でしたから」

「昔から」

「ええ。小さい頃、自走するいくつか小さな人形を作ってもらったことがあります」

紅茶がことりと音をたててテーブルに置かれる。彼女は一度腰を下ろしてから、思いついたように立ち上がり、部屋の小窓を開けた。外からはじい、という虫の音がする。湿度はなく、空に雲はないが月は新月で夜に明るさはないようだった。

私はじりじりと時が焼き付いていくのでは、と思うほどの気持ちの昂ぶりを感じた。友人の過去という謎めいた問題が彼女の内側から解けていくはずで、私は昔から難問と呼ばれるものが好きだったから、とにかく、心が騒いだ。彼女はそんな私をよそに、星空を眺めている。まるで私などいないかのように。先程、墓地から戻るときもそうだったが、彼女の対人意識は、私のよく知る身近な人物とは明らかに違うようだった。

何かを尋ねたい。しかし、きっかけがわからず、

「よろしければ、その人形を見せてくださいますか」と彼女の背中に言葉を投げかける。

彼女は振り向くと、ええ、と顔をほころばせて私を立たせた。あやうく飲みかけた紅茶をこぼしそうになったが、腕を引く彼女の力強さに半ば呆れ、軽く引きずられるように部屋を移動した。

「すみません、もつとゆっくり」

という私の声にも彼女は答えない。私は心の奥に軽い憤りの種が沸いてきたのを悟った。案内された部屋はもつと乱雑だった。間口いっぱい引き戸を滑らせると、忍び込んできた夜光が、床に散らばる工具や部品に濡れたような彩りを与えた。

部屋の中央に黒い人形がある。顔には一切の装飾はなく、磨き上げられた鏡のような表層部がわずかな光を受けて、白色だけを反射させていた。

光度を適度に抑えた、柔らかい橙色の光源に灯が入った。

不気味な黒い人形。等身大の胴体から伸びる手足の関節はおかしな方向に曲がり、尻餅をついたような姿勢で壁に寄りかかっている。なんともいえず奇妙なのは、衣服にくるまれていることだろう。顔のない胴体に衣服、いかに人間のかたちをしていようと、私はその限らない違和感におぞましい恐怖を感じた。私にも妹がいるが、たとえ自走する人形を妹に送ろうと決意しても、およそ考えもしないデザインである。

彼女は膝をつけてかがみ、その顔を優しくなでた。その仕草の艶やかさは例えようもないほどで、私はただ呆然とたちすくむ。このまましばらく、官能的ですらある彼女の仕草に見とれていたかったのだ。だが、私は内側から肉欲として沸いてくる本能よりも確かに異形とすらいえる人形の由来に心を揺さぶられた。

「お兄さんが作った人形」

「ええ」

彼女は手を休めない。私には遠景に似た光景だった。この家だけは世界が違うのでは、そう心から思ったほどだった。

「自走するのですか」

「ええ。とてもなめらかに」

不気味な予想が脳裏に過ぎる。

「みたい？」

いや、とはいえなかった。彼女の三日月様の両眼からは妖しい光線が流れ出ていて、私には抗う術がなかった。

「起こしてください」

私は促されるまま。

黒い人形に近寄り、肩口に左腕をあてる。

力を入れると思ったよりも軽く、しなやかに前傾した。黒い人形、彼の右腕を首に巻き付け、抱き起こす。その腕にいきなり起動が入り、私の首はあつけにとられたままくちやくちやにされるのではないか、という言いしれぬ不安が立ち上がった。私を怯えさせた。自走するからという話で見せてもらったのに、どうして自力で起きあがれないのか。不安を消すために私の思考が別の回路を探している。

「お似合いですね」

何がだろう。気づけば私はそんな率直な質問すら口に出来なくなっていた。彼女の淡い笑みの理由もわからず、しかし逃げ出すわけにはいかない。

正面からは見えなかったが、黒い卵形の頭部にはいくつも計装線が入っていて、線を追うとそのほとんどがハーネスでまとめられて体の中心部に向かっていて、一部が外部へと伸びている。行き着く先には、旧規格のメディアリーダーがあった。もしやと思い、私は、

「先程お渡ししたストレージですが」

と彼女に訊く。

「あ、そうでしたね」

間違いなかった。友人が送ってきたストレージの中身は、この黒い人形を媒体にして実世界にフィードバックできるようだった。

彼女は別の部屋に赴く。私は黒い人形と二人きりになった。好奇

心が恐怖を通り越して私の上層に上がってきたことなど、もちろん気づくはずもなかったが、体温が上昇し興奮を知覚できるようになると、自分の精神状態に察しがついた。私はどうしようもない男なのだ。友人の死すら、謎めいていなければただ過ぎ去っていくだけの現象としてしか認識しないだろう。生きるかたち、という不明瞭な言葉の響きが私をここに赴かせたといってもいいかもしれない。

生と死はデジタルだ、私はそう思う。生と死の間には何もなく不連続であって、関連もない。ただもう一人の私は、その繋がりを探している。もともと敬虔なクリスチャンの両親に育てられた。科学を知る前は神も信じた。合理性と論理の中に長くいる内に、神の存在は希薄になっていったが、私の内側にいる人格にはまだ神を信じる余白がある。死へと人がスイッチしていく過程の間に、簡単にはトレースできない謎があれば、あるいはもう一つの世界が連続性を伴って浮かび上がってくるのではないか。私はもしや、神を信じたいのかもしれない、そう思って自嘲気味に笑った。

白い発光を伴ったストレージが彼女に抱かれて、部屋に入ってきた。彼女はいつの間にか着替えをすませており、白いサマーセータを着込んでいる。背景に白を抱え込んでなお、ストレージが発光していることがわかるのだが、これを制作した人間は何をおもって趣向を凝らしたのだろう。

私がストレージを受け取ろうとすると、彼女は軽く拒んで、人形の横にかがみ込んだ。肩をすくめて私は彼女を見守る。

ストレージが旧式であったので、私は特に動作時間は気にしないことにした。恐ろしく伝達時間がかかるに違いない。磁気嵐が吹き荒れる宇宙空間で、ノイズキャンセラもブースタも無い状況で、地球から映像の伝達をされるようなものだろうと思っていた。

人形は私の思いとは裏腹になめらかに立ち上がった。ランし始めたのだ。

「あはああう」

意味を成す音の羅列には程遠い異音が、人形の、人でいえば耳の

辺りから聞こえた。その音のあまりの異質さが私を現実に引き戻した。背を伝っていく冷たい信号が、脳で論理的な集合としてまとまり、私の表層に恐怖をまき散らす。随分と時間が長く感じられ、恐怖を体得するまでに感じる時間の冗長さが、さらなる恐怖の引き金になった。

くるり、と首が私を向いた。

私は滑稽なくらい、ひっ、と口走って彼と対峙した。いまや私は、膝下に力を加えられずに彼を見上げているだけだった。

「そう驚くことはない」

友人の声だった。

動きのぎこちなさと、人形の流暢な言語はいかにも異質だ。

「わたしだ、ハルト」

驚くべきことに、人形、いや、彼は私を認識していた。

「キミなのか」

「ああ」

私は自失したまま、人形を見つめた。やがてゆっくりと朝靄が剥がれるように、私の脳裏がクリアになり始めると、重ね重ね友人と名乗る黒いのっぺらぼうの人形を見つめずにはいられなかった。

もう一度、問いたかった。

あなたは、本当にあなたであるのかと。

あるいはその問いは、本来私自身に問われるものであったかもしれない。

人形が認識する私は、いまここに私のことであるとは思いがたかった。なぜなら、こうして対話するようにプログラムされた全ての動作は、あの古いメディアに治められていたものであり、人形は過去の私をトレースしている。人形は、過ぎ去った時間の中にいる私と会話しているのであって、私は純粹な意味での次元の差を認識しなければ、彼との関係は成立しないのではないかと思った。

「兄さん」

彼女は、人形の腕にすがって甘い声を出した。

「元気にしていたか」

「ええ、とつても。兄さんは」

「見ての通りさ」

「見てもわからない」

私は苦笑した。

彼は、私に何をいつているのだろうと（表情など無いが、ノイズのような空気の乱れがそう見せたに違いない）という表情を向けた。私は、口にしたかった彼への疑問を、できるだけ陰湿なものにならないよう、言葉を選び、会話を始めた。

「よく見てくれ。キミの体はキミではない」

「ハルトにはそう見えるだけだろう」

「人の認識力を馬鹿にしちゃいけない。私にとって、キミは私の記憶の中の存在なんだ、重ねあわせることの出来ないパーソナリティなど、私は認めない」

「ハルト、君のあやふやな認識などわたしはあてにしない。わたしはわたしだ」

「自分の存在のあやふやさには気づいていないのか」

「存在には違いない」

「在ればいい、などと都合よくキミが考えるのであれば、私はキミを有能だと確かに感じていた時代の自分に告げ口をしたくなる。お前は馬鹿だ、と」

「兄さんは兄さんよ」

「そうだ」

「意識だけの存在か？」

「体はデバイスに過ぎない。我々の交流は常に官能的なものであって、すでに人はフィジカルな世界からは脱却したがっているんだ」

「キミは何者だ。宇宙からの侵略者か？」

「兄さんは兄さんよ」

「うるさい黙れ」

「妹を悪く言うのはやめてくれ。おかしいな、きつとうまくいくは

ずで、君は何も考えず私を受け入れてくれると信じていたのだが」

「その自信も数式の狭間から生まれたのか」

「君の言動も、そうに違いないだろ」

「人の体は、その事を限りなく曖昧にできるのさ。ところが君には体がない。生身の身体がない」

「わたしに何かを聞きにきたのだろう」

「はぐらかすのか」

「原点に立ち返っただけじゃないのか」

「そんなもの、もともとなかった」

「残念だよ」

彼はそれからけして私を見なかった。妹との他愛のない話に興じており、私はすぐに胸が悪くなつて彼の家を後にした。

外に出ると夜風がさやかだった。虫の音は聞こえなかった。

道々、私はなぜあんなにも胸を悪くしたのか、考えた。

つまり、人形は人形なのだ。間違いない。私の彼に対する嫌悪感、根本的な人とはこういうものである、という特に根拠のない感情に端を発するものだった。

しかし、彼が求めた生きるかたちとは、鏡面のように磨き上げられた、黒い人形の中にだけ、存在出来るものだったのか。そんなはずはない、とは言えなかった。

それにしても、と思う。見事なまでに筐体を作り上げたものだ。表情がないことなど何の足枷にもならない。ストレージを繋いだ後の人形の動きは本当に精巧だった。

だが、私のこのころのどこかに、記録された記憶など意味がないというひっかかりがあるのは間違いない。ただ、グロテスクであつても確かに彼そのものだと感じた人形の背後に、友人の求めていた答えの断片があるように思った。

ポケットを探ると指の先に何かがあたった。

取りだして街灯にすかすと、さほど考えずに懐に入れた女物のリップスティックだった。いまさら、あの家に戻って友人の妹に、

まさか返しに行こうとは思わない。

私は立ち止まってキャップを開き、口紅の赤い稜線を眺めた。銀白色の光源を取り込んだグロスは、輝きの中に橙色を携えて、わずかにギアオイルの匂いがした。

まさか、彼女はあの人形にこの口紅を塗ろうとしていたのか。

彼女の右手にあたった手の一部が、ゆるやかに熱を持っている。いやむしろ。

考えたくもない想像に、かつてない鈍い衝撃をこころに受けながら、私は友人の手紙に記された一文を思いだしていた。

私は君と私の妹が出会うことで、この世界がどのように変容するか、みてみたいものだ。

いまここで。

私立ち止まって口紅を眺めたのはなぜだろう。

世界が、変容したのか。

「ばかばかしい」

私は街灯の軸に口紅をぐちゃぐちゃに塗りつけた。どうだ。

これが私の生きるかたちだ。

世界が変わろうが、私は私だ。

つぶれた赤い顔料が私の圧力にととう屈してうしなわれ、ケースが街灯にぶつかってかわいた金属音がすると、私は我に返って再び歩きはじめた。

ステイックは捨てた。

友人をひとり失った。

いや、最初からそんなものはいなかったのだ。

第2話（後書き）

なんとか。

書き終わっています。

かたちのないはなは、
まだもっしばらく・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2270k/>

リップ

2010年10月8日15時05分発行